

# 15世紀の沖縄語（音声・音韻）

—口蓋化・破擦音化／有声子音の前の鼻音—

多和田 眞一郎

沖縄語の歴史を跡付ける営為の一環として15世紀沖縄語の音声・音韻について考察する。既に、多和田（1997）において15・6世紀沖縄語の音声・音韻についてかなり詳しく論じたが、外国資料に重きを置いた分析であったので、仮名資料等も含め、存在する資料全てを対象とした『沖縄語の歴史（音声・音韻）』を構想している。今回は、その基礎として、改めて考究しようとするのであるが、紙面の都合上「口蓋化・破擦音化」と「有声子音の前の鼻音」に絞ることとする。

今まで「沖縄語の歴史」に関する資料について記述する際に「15・6世紀」という括りをし、その筆頭に「語音翻訳」（1501）を置いてきた。しかし、これは「刊行年」だけに重きを置いた機械的分類であった。「語音翻訳」の末尾に「弘治十四年四月二十二日 啓下承文院」とあり、『朝鮮王朝実録』『燕山君日記』卷四十「七年 大明弘治十四年五月」の件に琉球使節が来朝した折に宣慰使の成希顔に命じてその「風土人物世代」について聞き書きをさせたという記述があることで、「語音翻訳」の成立は「弘治十四年」即ち「1501年」とされる。確かに「成立」は「1501年」であるが、収録された言語も「1501年」の資料とするのは、余りに機械的に過ぎたと言わざるをえない。記録された言語資料は、記録された当時よりは前の時期の言語事実を反映するのであるから、その観点に立って「語音翻訳」に収録された沖縄語を15世紀後半のそれとして位置付けるべきであったのである。改めてそのようにしたいと思う。

「語音翻訳」を15世紀後半の沖縄語資料としたうえで、そこに現れている「口蓋化・破擦音化」と「有声子音の前の鼻音」について吟味する。

## I、口蓋化・破擦音化

口蓋化と破擦音化現象について考えるために、

- (1) /-ika/, /-iga/, /-ita/, /-ida/
- (2) /-ike/, /-ige/, /-ite/, /-ide/
- (3) /ki/, /gi/, /ti/, /di/
- (4) /su/, /zu/, /tu/, /du/

を取り上げる。

語例については、ハンゲルの転写で示す。音節と音節との間に「・」を入れて区切りを示すことにする。

(1) /-ika/, /-iga/, /-ita/, /-ida/

/-ika/, /-ita/は現代語の [tʃa] と、/-iga/, /-ida/は現代語の [(d)ʒa] と対応する。

1、/i/の後の「カ」は「kja」で表記されている。口蓋化していることになる。

(例) i · kja (如何) {現代語は [tʃa] である。}

/-ika/の例は他に見当たらないが、口蓋化を示す例としては、これ一例で充分であろう。

2、/i/の後の「ガ」は「kja」で表記されている。口蓋化していることがわかる。

(例) ni · kja · sa (苦さ) {現代語は [ndʒasaɴ] である。}

ただし、この例については説明が必要である。「ri · ka · sa」とあって、一見口蓋化の表記がなされていないように見えるが、子細に見ると、(ハングルの)「ka」の「a」の部分の横線が次の「sa」の「a」のそれより少し上にある。他の「a」の部分と見比べても同じことが言える(上のほうにあるので)「ja」とあったのが、下の横線が印刷不鮮明で消えてしまった可能性が高い。つまり、「ri · ka · sa」は「ri · kja · sa」であったはずのもので、口蓋化を示す表記のなされた例であると判断される。

「ri」は「ni」の誤りと考えられるものであるから「ni · kja · sa」であり、[nigjasa]を示していることになる。(→参考図 参照)

3、/i/の後の「タ」は「cja」で表記されている。破擦音化を示す表記である。

(例) si · cja (下)、si · cja (舌)

現代語は、「下」は [ʃitʃa] であるが、「舌」は [ʃiba] であって語彙の取替えが起こっている。

/i/の後の「ト」の中にも「c」「ch」で表記されたものがある。破擦音化がかなり進んでいたことを知ることができる。

(例) phi · chju (人)、phi · cjo (人)

15・6世紀頃の朝鮮語の(ハングル)「c」「ch」は、それぞれ [ts]・[tsʰ] であるとされるが、「chja」(茶)の例があり、(当時の沖縄語に) [tʃ] も確認できる。

4、/i/の後の「ダ」に関しては語例が見当たらないが、/-ita/の例から推して破擦音化していたであろうと考えられる。

(2) /-ike/, /-ige/, /-ite/, /-ide/

/-ike/, /-ite/は現代語の [tʃi] と、/-ige/, /-ide/は現代語の [(d)ʒi] と対応す

る。

1、 /-ike/ 用例なし。

2、 /-ige/ 用例なし。

3、 /-ite/

まず、用例を見る。 /-ite/以外の /te/ も参考のために示す。

kit·cjoï (来て)、' is·cjoï (入りて)、' aŋ·kat·tjoï (上がりて)、ku·mo·tjoï (曇りて)、phut·tjoï (降りて)、' i·' u·ti (酔ひて): thi (手)、thjɔn (天)、pha·ri·tjoï (晴れて)、pha·rit·tjoï (晴れて)

{対応する現代語はそれぞれ、[ttʃi] (来て)、[ʔittʃi] (入って)、[ʔagati] (上がって)、[kumuti] (曇って)、[ɸuti] (降って)、[ji:ti] (酔って)、[ti:] (手)、[tiŋ] (天)、[hariti] (晴れて) である。}

/i/に先行された「テ」はその影響を受けて破擦音化している（「来て」「入りて」の例）と言えるが、「曇りて」「降りて」の例が示すように、破裂音の段階にあるものもある。同じ音環境にあると言える「入りて」と「曇りて」「降りて」とが異なる現われを示しているのは、正しく過渡的現象を物語っていると言えよう。

4、 /-ide/ 用例なし。 /-ite/に準じるのではないかと思われる。

(3) /ki/, /gi/, /ti/, /di/

/ki/, /ti/は現代語の [tʃi] と、/gi/, /di/は現代語の [(d)ʒi] と対応する。

「カ・ガ、タ・ダ」がその前の母音/i/によって口蓋化及び破擦音化が起こるのに対し、「キ・ギ、チ・ヂ」は自身の母音/i/だけによりそのような変化が起こる。

「チ・ヂ」を取り上げるのは、「キ・ギ」の破擦音化、「テ・デ」の口蓋化さらには破擦音化との関係を見るためである。

1、 /ki/

「キ」相当部分は（ハングルの）「ki」「khi」で表記されている。破擦音化していない。

(例) kit·cjoï (来て)、ki·mo (肝、心)、ki·ru<nu> (衣、着物)、' ju·ki (雪)、' a·ki (秋)

{対応する現代語は、それぞれ、[ttʃi] (来て)、[tʃimu] (心)、[tʃiŋ] (着物)、[jutʃi] (雪)、[ʔatʃi] (秋) である。}

2、 /gi/

「ギ」相当部分は（ハングルの）「ki」で表記され、破擦音化していない姿を見せている。  
（例）' u · saŋ · ki（兎） 〔現代語は、[ʔusadzɪ] である。〕

### 3、/ti/

「チ」相当部分が（ハングルの）「ci」で表記されていて、明らかに破擦音化している。  
（例）ci（地）、khu · ci（口） 〔現代語は、[dʒi:]（地）、[kutʃi]（口）である。〕

4、/di/ 用例なし。「チ」との対応から考えると「ci」か「zi」かで表記され、破擦音化の様相を示したはずである。

#### （4）/su/, /zu/, /tu/, /du/

/su/は現代語の [ʃi] と、/zu/は現代語の [(d)ʒi] と、/tu/は現代語の [tʃi] と、  
/du/は現代語の [(d)ʒi] とそれぞれ対応する。それぞれ

[su] → [suw] → [si] → [si] → [ʃi]、

[(d)zu] → [(d)zuw] → [(d)zi] → [(d)zi] → [(d)ʒi]、

[tu] → [tsu] → [tsuw] → [tʃi] → [tʃi] → [tʃi]、

[du] → [(d)zu] → [(d)zuw] → [(d)zi] → [(d)zi] → [(d)ʒi]

等と変化したものと考えられ、口蓋化と破擦音化とが集約的に現出する項目である。

### 1、/su/

（例）saŋ · ta · sa（涼しさ）、sa · ' u（酢？）、sa · ca · ri（硯）、sa · mi（墨）、' ja ·  
sa · mjo · ' is · cjo（休み入りて）、ro<no> · ma · sa · ra<na>（飲ますな）、ma ·  
saŋ · ko（真直ぐ）

〔対応現代語は、[ʃidasə]（涼しさ）、[ʃi:]（酢）、[ʃidʒiri]（硯）、[ʃimi]（墨）、  
[jaʃimiʔittʃi]（休み入って）、[numasuna]（飲ますな）、[massugu]（真っ直ぐ）である。〕

「飲ますな」「真直ぐ」の例に関して保留すべき要素を含むが、「語音翻訳」による限りにおいて、15世紀後半頃の沖縄語の「ス」は、[suw] の段階であったと判断される。

ところで、近年まで「貴族・士族」の成年男子が区別していたとされる [ʃi] と [si] との対立は、次の例のように、[ʃi] が「シ」・「セ」に対応し、[si] が「ス」に対応するものである。

[ɸu ʃi]（星）、[ʔaʃi]（汗）、[sina]（砂）、[simi]（墨）

[u] → [uw] → [i] → [i] 等と変化したことによって、「シ」「セ」と「ス」との対立が [ʃi] と [si] との対立として実現したものと考えられるから、「ス」が [suw] の段階であったと判断される15世紀後半頃の「シ」は [ʃi] で「セ」は [si] であった可能性が高い。

2、/zu/ 用例なし。/su/に準じた解釈が可能か。

3、/tu/

(例) pi・cΛ・cja (羊)、tha・cΛ (龍)、nat・cΛ (夏)、koa・cΛ (ぐわつ、月)、pu・tjɔi・cΛ (ふてつ、一つ)、cΛ・ki (月)、cΛ・ra (面、顔)、chΛ・ra (面、顔)

{対応現代語は、[ɸitʃidʒi] (羊)、[tatʃi] (龍)、[natʃi] (夏)、[ɡwatʃi] (月)、[titʃi] (一つ)、[tʃitʃi] (月)、[tʃira] (面) である。}

[tu]ではなく、破擦音化した段階の [tsu] である。「chΛ・ra」の例から、更に口蓋化が進みつつあることもわかる。

4、/du/ 用例なし。/tu/に準じるものと考えられる。

## II、有声子音の前の鼻音

多和田 (1997) (p.483-493) でかなり詳しく述べたので、新しい事柄はないが、以後の記述のために確認しておくという意味でとりあげる。

「語音翻訳」に見る限りにおいては、有声子音の前の鼻音の存在は否定できない事実である。日本語全体の歴史を考える際にも示唆を与える事柄である。

用例をみる。

sja・'oŋ・ka (生姜)、'u・saŋ・ki (兎)、'aŋ・kui・ri (上げれ)、  
'a・kui・ra (上げら)、khan・cui (風)、sa・cΛ・ri (硯)、phun・ti (筆)、'o・pa・ri<ni>、'om・pa・ri<ni>、'o・pan・ri<ni> (御飯)、'a・saŋ・pi (遊べ)

{対応する現代語は、[so:ga:] (生姜)、[ʔusadʒi] (兎)、[ʔagiri] (上げれ)、[ʔagira] (上げら)、[kadʒi] (風)、[ʃidʒiri] (硯)、[ɸudi] (筆)、[ʔubun] (御飯)、[ʔaʃibi] (遊べ) である。}

用例は少ないが、[-ŋg-] [-ndʒ-] [-mb-] と相補性を見せている。

用例、'aŋ・kui・ri (上げれ)、'a・kui・ra (上げら)、'o・pa・ri<ni>、'om・pa・ri<ni>、'o・pan・ri<ni> (御飯) が示すように、また、現代語がそうであるように、この鼻音は早晚消失する。その時期はいつか。漢字資料、アルファベット資料等も駆使して調べてみたのが以下の表である。

資料を示すのに略号を使っている。以下のような。

翻 = 「語音翻訳」(1501年) (ハングル資料)

館 = 「琉球館訳語」(16世紀前半成立か) (漢字資料)

使 = 『使琉球録』(1534年) (漢字資料)

字 = 『音韻字海』(1572年頃) (漢字資料)

信 = 『中山伝信録』(1721年) (漢字資料)

見 = 『琉球入学見聞録』(1764年) (漢字資料)

クリ = 「クリフォード琉球語彙」(1818年) (アルファベット資料)

漂 = 『漂海録』(の「琉球」語) (1818年) (ハングル資料)

語例は、

<ガ行子音の前> (1) しゃうが (生姜)、(2) あふぎ (扇)、(3) うさぎ (兎)、(4) むぎ (麦)、(5) をぎ (荻)、(6) あげ〜 (上) (あげら、あげよ、あげて)、(7) をなご (女)、

<ザ行子音の前> (8) かしらげ (頭毛) (カラジゲ)、(9) くじやく (孔雀)、(10) かぜ (風)、(11) すずり (硯)、(12) ぼうず (坊主)、

<ダ行子音の前> (13) ひだり (左)、(14) かぢ (舵)、(15) みづ (水)、(16) ふで (筆)、(17) まど (窓)、(18) もどる (戻) (もどり)、

<バ行子音の前> (19) おばに (御飯)、(20) おび (帯)、(21) くび (首)、(22) あそぶ (遊) (あそび、あそべ)、(23) ねぶる (眠) (ねぶり)、(24) びやうぶ (屏風)

である。

以上の語例に関して、当該音節の用字をまとめたもの、その用字の韻尾に鼻音を有するか否かをまとめたもの、それぞれを表にしてみると、それこそ一目瞭然である。

有声子音の前の音節の用字

	翻	館	使	字	信	見	クリ	漂
しやうが	'oŋ	/	/	/	焼	芍	/	/
あふぎ	/	昂	昂	枉	枉、丫	窩	o	'o
うさぎ	saŋ	撒	撒	撒	殺	/	/	/
むぎ	/	蒙	蒙	皿	/	/	/	/
をぎ	/	翁	翁	翁	翁	/	/	'u
あげ〜	'aŋ, 'a	昂阿	昂阿	安	阿	/	/	/
をなご	/	/	/	男	南	那	na	na
かしらげ (カラジゲ)	/	藍	藍	藍、籃	籃、蘭	/	/	/
くじやく	/	公	/	枯	姑	/	/	/
かぜ	khan	嗑	監 嗑	嗑	喀 (買)	哈 噶	ka	kan
すずり	sa	孫	孫	孫	思	息	/	/
ぼうず	/	包	鮑	褒	巴	/	bo	/
ひだり	/	分	分	分	分	虚	fee	/
かぢ	/	看	看	看	看	哈	ka	/
みづ	/	民	民	民 血	血 閔	媚 蜜	mee	mi
ふで	phun	分	分	忿	夫	弗	hoo	hu
まど	/	慢	慢	/	馬	麻	/	/
もどり	/	慢	慢	閔	閔	木	moo	/
おばに	'om, 'o	翁	翁	汪	叺	翁	/	/
おび	/	/	文丈	文	文 烏	烏	/	/
くび	/	/	/	空	枯 科	/	coo	/
あそび (べ)	sam	孫	遜	/	/	/	/	/
ねぶり	/	眠	眠	眠	/	/	/	/
びやうぶ	/	飄	飄	飄	飄	妙	/	/

「/」は用例なし。

有声子音の前の音節末の鼻音の有無

	翻	館	使	字	信	見	クリ	漂
しやうが	○	/	/	/	×	×	/	/
あふぎ	/	○	○	○	○, ×	×	×	×
うさぎ	○	×	×	×	×	/	/	/
むぎ	/	○	○	○	/	/	/	/
をぎ	/	○	○	○	○	/	/	
あげ～	○, ×	○, ×	○, ×	○	×	/	/	/
をなご	/	/	/	○	○	×	×	×
かしらげ	/	○	○	○	○	/	/	/
くじやく	/	○	/	×	×	/	/	/
かぜ	○	×	○, ×	×	×	×	×	(○)
すずり	×	○	○	○	×	×	/	/
ぼうず	/	×	×	×	×	/	×	/
ひだり	/	○	○	○	○	×	×	/
かぢ	/	○	○	○	○	×	×	/
みづ	/	○	○	○	○	×	×	×
ふで	○	○	○	○	×	×	×	×
まど	/	○	○	/	×	×	/	/
もどり	/	○	○	○	○	×	×	/
おばに	○, ×	○	○	○	×	○	/	/
おび	/	/	○	○	○, ×	×	/	/
くび	/	/	/	○	×	/	×	/
あそび (べ)	○	○	○	/	/	/	/	/
ねぶり	/	○	○	○	/	/	/	/
びやうぶ	/	×	×	×	×	×	/	/

「○」は鼻音あり。

「×」は鼻音なし。

「/」は用例なし。



以上のようにして、あらゆる項目において吟味していき、1500年前後から1970年代までの沖縄語の音声・音韻の変遷を辿ろうというのが『沖縄語の歴史（音声・音韻）』の構想である。

参考文献

- 高橋俊三（1991）『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院
- 多和田真一郎（1997）『外国資料を中心とする 沖縄語の音声・音韻に関する歴史的 研究』 武蔵野書院

参考図

（6行目の「苦」の項、最後の字「フ」の右側の部分に注目）

야 누 스 弓 弦 이 우 미 누 조 누 窓 로 오 리	우 티 箭 이 야 弓 俵 이 우 미 누 스 箭 俵 이	카 니 사 硯 스 즈 리 墨 스 미 筆 핀 디 弓 이	사 酸 쉬 샤 淡 아 바 샤 醜 시 바 가 나 샤 粹	소 내 燒 茶 차 와 가 사 甜 아 미 사 苦 리 가	오 生 薑 샤 웅 가 葱 깅 비 나 蒜 픽 루 菜 蔬	末 난 다 리 카 다 시 胡 椒 코 슈 川 椒 산 시	油 아 부 라 鹽 미 시 오 醬 비 쇼 醋 스 우 芥	시 시 猪 肉 오 와 시 시 兔 肉 우 상 기 시 시	시 랑 가 디 肉 시 시 魚 이 우 鹿 肉 카 우 루
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---